

安齋 伸著

『南島におけるキリスト教の受容』

第一書房(1984年・3000円)

ヤン・スィングドー

日本におけるキリスト教の受容というテーマは、様々な観点から研究されてきたが、その研究書を詳しく調べてみると、ほとんどキリスト教をプロテスタントの伝統に限っており、ローマ・カトリック教会の受容に関する報告はきわめて少ないことがわかる。当書は、この空白をみたそうとする試みとして注目に価する研究であることは明らかであるし、ある意味で処女地にくわを入れる研究であるだけに、新鮮さにあふれていることも当然といえよう。

著者の安齋氏が「序」と「あとがき」に記したように——期待通り、これらのページは最も明瞭に著者の意図を表現しているのであるが——当書は、独特の宗教文化を持つ奄美・沖縄で20年にわたって行なわれた調査研究の報告であり、著者が「はや還暦を過ぎ、調査旅行にも一応の区切りをつけねばならないときが訪れ」たことに鑑みて、「読者の寛大なご意見・ご批判をお願いします」機会にもなっている。書評を依頼された筆者は喜んでこの願いに応じ、恩師でもあり、大先輩およびよき友でもある安齋先生の労作を『年報』の読者に紹介したいと思う。

『南島におけるキリスト教の受容』は三部から成り立っている。第一部「南島における諸宗教の受容と展開」は、(1)奄美におけるカトリック、(2)沖縄におけるカトリック、(3)沖縄におけるイエス之御霊教会、および(4)沖縄における創価学会の伝来と歴史的展開を記述し、概論でありながら、時として著者に特有のユーモアを飛ばしてきわめて具体的なエピソードや面接の記述を通してこれらの諸宗教

の生き生きとしたイメージを描く。

第二部「奄美・西阿室の村落生活の変動と宗教」で、著者は各論に入り、戦後カトリックが布教されて僅か300名の人口のうち、一挙に90名以上の受洗者を出した、小さい村落での現地調査の結果を報告する。過去20年間の激しい社会的・文化的変化に焦点が合わされ、伝統的なノロ制度の崩壊と神祭廃止とともに、移入宗教の推移が綿密に述べられる。この状況において注目に価するのは、村落共同体の維持と発展の問題であり、ある程度宗教性を脱却した神社がほとんど全住民の協力によって再建されたという出来事は、村落の再統合のあかしとしてとくに興味深い。

第三部「南島文化へのキリスト教の適応」はもう一つのケース・スタディ、すなわち「宮古島保良の基層信仰と移入宗教」ではじまり、その次の、当書の最後の二章で、著者は一種のまとめを試みる。「宗教受容における適応の諸相」の中で、沖縄に移入された創価学会、イエス之御霊教会とカトリック教会の三宗教について、宣教のあり方に眼を注ぎながら、その適応と不適応の側面を述べ、とくに宣教者の姿勢とパーソナリティの重要さを指摘している。そして「キリスト教の受容と適応」の中で、調査地であった西阿室と保良の両村落におけるカトリック教会の受容、定着と停滞の諸過程を比較し、様々な具体例を挙げながら改宗前の宗教と受容宗教との間の連続性と非連続性を記述する。さらに、巻末には「欧文概略」と「索引」も付いているので、読者には大変便利である。

冒頭に述べたように、当書は、今まであま

り学問的研究の対象になっていない、日本におけるカトリックの受容というテーマを取り扱っているので、きわめて貴重な書物である。安斎氏を真の意味での開拓者と呼ぶことができようし、氏のライフ・ワークがようやく出版の運びになったことは大いに歓迎すべきである。一言で本書の性格を表現するなら、「基礎研究」という言葉が最も適切であるに相違ない。

「基礎研究」が決して簡単な作業ではないことは言うまでもない。本書を読んでいる間にこのことがよくわかるし、著者のはらった苦労も始終うかがわれる。離島での調査それ自体、多大の手間がかかったであろうが、とくに調査結果の解釈や理論づけの仕事の困難さが明確に浮き彫りになってくる。著者は何度も繰り返して、「今後の調査研究が期待される」とか、「完成を後進の鋭才たちに期待しつつある」とか、謙遜な言葉づかいでご自分の業績を過小評価するのであるが、将来に同様の研究がいくら進み、発展していても、安斎氏の基礎研究は一種の古典として残るに相違ない。

無論、それは安斎氏が基礎研究の作業に伴う畏を全部避けることができたという意味ではない。「寛大に」それらを指摘させていただければ、まず第一に本書の構成に関する問題点をいくつか取り上げなければならないだろう。著者自身が認めるように、第二部（西阿室調査報告）を除けば、時間的余裕が十分になかったため他に収録された諸論文を整理することができなくなり、手を入れた上で適宜、章別に配列するとどめざるを得なかった。その結果、重複や繰り返しがきわめて多く、論理の展開を把握することはしばしば困難になってしまう。例えば、246頁に、ユタの呼称についてみごとな説明が書いてあるのであるが、同じ説明はもう一度306頁——今度は註の中に——出てくる。繰り返しそれ自体必ずしも悪いものではないが、この例からみるように、構成上の別の問題点が絡み合ってくると思われる。すなわち、どのこ

とを本文の中に、どのことを註の中に入れるべきかという問題である。私見によれば、この点、つまり重要なポイントとそうでないポイントの見分けという点に関して、当書のみならず、日本で出版される多くの学問書が当惑を呼び起こす。本書の場合にこの問題点を最も明確に例証するのは、「索引」にはかならない。「ユタ」を引いたら、19箇所（一番多く）、「適応（個人的・社会的・宗教的・文化的）」は13箇所、「オーバン（＝レイモンド神父）」は9箇所があげられるが、「奄美大島カトリック教会」、「沖縄カトリック教会」、「カトリック教」、「西阿室のカトリック」等々、それぞれ1箇所限りである。本書は一体何についての本だろうか、と迷ってしまうしかない。要するに、著者は原稿提出の締め切りに間に合うように大分あわてたようであり、この「人間的弱さ」は、共感を起こしながらも、あまりにも過大に本の中に浮き彫りにされている感じを禁じ得ない。

構成にも、また内容にも関連するのであるが、人類学者あるいは民族（民俗）学者が時々犯す「罪」を、安斎氏も完全に避けることができなかつたようである。実地調査の方法としては、主に面接聞き取りが採用されたが、被面接者の生の声のみならず、彼らの実名も記録されている。それはたしかに記述を文字通りに生々しいものにし、読者にも調査の対象となった村落やその人間に対する深い親近感を抱かせるのである。一方、人間的関わり合いのあまり、客観的考察が多少妨げられることも考えられないことはない。安斎氏は、所々批判的な意見を述べることもあるものの、全体として南島の状況をやや^{イデオロギック}牧歌的に描写しており、現実果たしてどうだろうか、少なくとも筆者の好奇心をそそるのである。

『南島におけるキリスト教の受容』は主として報告書であるので、その性格上、単なる記述が多く、理論化が比較的少ないことは当然といえるかもしれない。また、人口の非常に少ない村落に調査を行なう場合、その結果を無理に一般化しようとする、間違った

イメージを与えることになるというのも、著者自身はよくわかっているようである。ちなみに、絶対数が極端に少数である場合に、それをパーセントで表わすのは、控え目にいっても、変な感じを与える。例えば、西阿室の創価学会員のうちに「25%」は神社の改築に対して否定的な意見を述べたそうであるが、これは「絶対数からみるならば76回答世帯のうち僅かに三世帯であること」(226頁)を考慮すれば、パーセントでの表示の限界があまりにも明瞭にさらされる。

本書の主要テーマであるキリスト教の受容についての理論的位置づけは、主として最後の章で行なわれるが、問題の所在の後、文化的変化、社会的・個人的条件および教会側の要因など、みごとに整理されたまま諸要因が指摘される。しかし、この理論的解釈が僅かに15ページに終わってしまうということは誠に残念としか思えない。極端な言い方を許されれば、本書の理論的部分があまりにも簡潔なので、著者の理論的立場について活発な討論を行なう余地はほとんど与えられていない。実例に立脚しながらも、そこから離れて、例えば第二部(西阿室の調査報告)の中で言及した家と村落共同体の相互関係およびそれ

における祖先崇拜などについてより本格的な考察や理論づけが欲しかった。そしてまた、南島というマイクロコスモスは、どの程度まで日本国というマクロコスモスを反映しているか、とくにこの根本問題がただ断片的にしか取り扱われていないことは、一種の不満を残すものである。

以上、安齋氏のご要望に応じて、寛大な、しかも批判的な目で氏の力作にコメントを加えさせていただいた次第である。「不満を残す力作」という表現に語弊があるかもしれないが、それを肯定的な意味でとらえていただきたい。本書を読むとき、筆者は始終著者の深い学識および人間味にあふれた書き方に魅せられてしまったからこそ、大いに期待する所が次々生じてきたわけである。安齋氏は、「完成を後進の鋭才たちに期待しつつある」と述べたが、氏ご自身はまだお若いので、願わくは、ご自身のライフ・ワークはまだまだ終わっていないことを自覚されて、とくに日本におけるキリスト教の受容の問題について相変わらず温情にあふれたご指導を給わらんことを、切に念ずるものである。